

# 行事保育の反省 (その二)

今まで通りでいいのでしょうか



清水エミ子

## 《たん生会》

入園して始めての誕生会が近づいた日、ちょうどその日新太郎君のたん生日だったので、私は「新ちゃん、お誕生日おめでとう」というと、新ちゃんはキョトンと私を見上げました。「新ちゃん今日お誕生日でしょ」ときき直すと、「しらない」といつて恥ずかしそうにしました。私はしまった、と思い、あわてて「お母さん忘れたのかな、それとも幼稚園から帰ってきたらおしえてくださるのよ」とつけ加えました。

## 子どもの理解

この話をそばで聞いていた、はじめ君が「いいな新ちゃん、お誕生日ってケーキたべる日だぞ、ケーキたべられていいなあ」といいました。その他隆君やそばにいた二、三名が「ちがうよ、何かかかってくれる日だよ」といいかえていました。こんな事があったので

私はその日の朝、皆で集った時「お誕生日って何の日なの」ときいてみました。すると和子ちゃんが「やだな、先生赤いごはんたべる日じゃない」ときも先生のくせにといわんばかりに、あごをしゃくっていました。

・僕のほしがっている自転車かっでもらう日だよ。

・おばあちゃんとお大師さんへいっておそばたべてくる日、(西新井大師)じゃないの。

・お父ちゃんごちそう、チャーハン、たべにいくの。

というのです。あとの大半は、わかんない、しらない、というしまつでした。私はびっくりして、他の級の先生方にも同じことを子どもたちに聞いてみていただきました。すると一つの学級は(一年保育12月~3月まで)

・お花をかぎるの。

・ケーキかうの、たのしいから。

・クリスマスみたいなケーキたべるの。

・あたしのお正月なのよ、本当のお正月はみんなのでしょ。

彼は答えなしというのです。

そして年中（8月〜11月）の学級は、

・おいわいする日。

・六つになる日。

・皆をおまねきする日（他の子どもたちには理解できなかった。）

・赤いごはん食べる、うれしいから。

・ケーキをたべる。

というのだそうです。この結果でもわかるように、百二十名の幼児の中で、年中組の子たった一人が、六つになるといっただけなのです。それも何と不たしかな理解なのでしょう。これは足立区という地域だからなのでしょう。私はここでもまた、幼稚園の行事（単元外活動）のとりあげ方に行きづまってしまったのです。

節分とか子どもの日などの社会の行事はさておき、幼児自身の行事である誕生日を、生れてから五回も過してきているのに、こんなにも貧弱な記憶（認識）しかないのです。これは一体何が原因しているのだろうかと考えさせられてしまったのです。また五才の幼児は発達からみて、しかたがないだろうか、自問自答してみたりしたのです。そして、おとなの考えは、子どもたちのたん生をどう考

えているでしょうか。

#### おとなの理解

まず母親や家庭の人々はどうでしょう。そこでお家の人（お母さん）に誕生日ってどんな日か聞いてくることにしました。（口答で、かいてくると辞書をひいたりするので）

・自分の記念品だってよ。

・年が大きくなる日なんだって、大きくなったってごちそうたべるんだってよ。

・病氣しないで大きくなったからごほうびにデパートにいったんか買う日なんだよ。

・神さまに、げんきですって、どうもありがとうする日で、お礼にごちそうあげて、みんなもたべる日なんだってよ。

というのです。家の人々は無事に元気で大きくなったことを喜び、これからも元気で成長するように、いろいろのものを買っていろいろのことをするのでしょう。しかしその気持が子どもに正しく通じていないのですね。そして表面の何か買ったべたりするのとだけを強く知らせその後に申しわけに誕生日だからね。とつけ加えるだけなのです。だから、たべる、かうとしか理解していないのです。

それでは、幼稚園ではどうでしょう。私たちはどうやって祝ってあげているでしょうか。

## 幼稚園でのたん生会

- ・たん生日のよろこびを知らせ、両親に感謝の気持を持たせる。
  - ・友だちの誕生日をよろこび合ってお祝いしてあげる。
- など立派な目標の下に

・贈物を作って祝ってあげる（くびかざりやその他）。

・園から、お祝の品をいただく。

・みんなでのたのしい会をして祝い合う（人形芝居や、幻灯会など）。

・みんなでおそろいのお菓子をいただく。

園長先生からお母さんお父さんにお礼をいしましょう。元気なよい子になりましょうねと話をきく。

これを毎月（子どもがちがうので）くりかえしているのではないでしょうか。

今までの結果でもわかるように、家の人も幼稚園の先生方もおどろいたことには、（子どももおとなも）その事からの意味より、物という、ことにすべて結びつけて考えているということ。たべる、買ってもらう、が切りはなせないですね。これは日本人の特性でしょうか、おとなの会でもすぐのんだりたべたり、もらったりあげたり、ということ。物でなく、心に忘れることのできない、うれしい意義ある誕生日を（心の祝いを）してもらっている子が百二十名の子どもたちの中で何人いるのでしょうか。日本人は、心と心で祝い合うことがあまりにも少ないのではないのでしょうか。

## 心の祝いを

そこでもう一度幼稚園の誕生日会をふりかえってみるとやはり物がついているのです。物をあげたりたべたりする事がいけないのではなく、何か自分の心に忘れられない思い出をのこしてあげているかということなのです。恥ずかしいながら、幻灯をしてあげたり人形芝居をしてあげたりして、そしてお祝いの物を友だちにもらったりした後お菓子を食べたりのんだりの状態をぬげでないのですね。これではいけないのです。幼稚園の誕生日会のうれしさがおとなになっても忘れられず、友だちや自分の子どもたちに話したりしてあげられるような誕生日会はできないのでしょうか。日本では、とか、今までこうしてきたのだからで、できない、とあきらめてしまわずに、何とかよい誕生会を考えなくてはいけないのです。これが幼稚園教育の大切な役割ではないのでしょうか。情操教育とか道徳教育とか題目だけ頭の中で考えているのでなく、幼稚園生活の具体的な場面一つ一つを正しくとらえ子どもたちの心の中にしっかりと浸透させていかななくてはいけないと、骨身にしみて感じました。体で、そして心で正しくうけとめていないから、たべる、物を買ったりもらったりすることしか覚えていないのだと思います。

## こんなことを

そこで私は、こんなことを試みてみたのです。まず今までのたべたりもらったりを全部やめてしまうのではなく（全然いけないこと

はないので、やはり子どもたちは心まことに楽しみに待っている(で)さらって行ない、その後で大きくなった喜び、もつと元気に大きくならうとする気持をもたせ、親に感謝の気持をするように、そして友だちの誕生日をよろこび合えるようにするため、

・お誕生者に赤ちゃんの時の写真を持ってきてみせ合う。

そして赤ちゃんの時の思い出話をしあう。前の日にお母さんや家の方に赤ちゃんの時のおもしろいお話をきいてきて発表する。(お母さんの事タータンっていついていた。)

・おしゃじの赤のがすきではなさなかつたんだって、目がねかけている人みるとすぐ泣いたってよ。

・ハイハイして縁側からおちたんだって。

・とつてもおでぶちゃんだったんだって。

・すぐおっぱいかんだんだってき。

・卵たべるとすぐお腹こわしてお医者さんによくいったんだって。

等々を発表しあうことにしたのです。(前の日母親に思い出を話してあげて下さるようにおねがいの手紙をだしてかえすのです)この時の子どもたちは、話をする子も聞いている子も、たのしみながら目をかがやかしてくいているようにきいているのです。ふだんの話し合いはなかなか思うように進まないのに、先生なんか何もうわななくても子ども同志自分のことを話したり、友だちにきいたりでもてもなごやかな一時になるのです。

そしてその後、友だちのおくりものを分け、祝い菓子をいただきながら、教師である私が体の弱かった人やきかん坊を大きくしたお母さんたいへんだったでしようねと話したりすると、子どもたちは教訓として受けとらず「おんぶしてたべたごはんは味がわからなかった」っていついたよ、「よくおせんの上のひっくりかえされたからどこへ食べたかわからなかったよ」などと、ひとりで母親の苦勞を体と心で理解していくのです。そして「だから僕おとなになつたらお母ちゃんにたくさん手伝ってあげるんだ、わるいもの」などということばもきかれるようになったのです。

### 《子どもの日》

次にやってきたのが子どもの日の行事です。これもまた問題がたくさんありました。まず子どもの理解の実態は、

◎子どもの日って、どんな日

△足立区V

・子どもたちの日。

・こいのぼりを飾る日。

・かしわもちたべる日。

・お人形(男の)かざる日。

・この日はねお父ちゃんやおかあちゃんがおこれない日。

幼稚園での子どもの実態の一つに国旗けいよう台にふき流しとこ

いのぼりをたてました。子どもたちと一しょにスルスルとあげていった時私が「これなあに」というと、

・こいのぼり。「上についているのは」と聞くと、たこの足でしょ。

「だけどうしてなの、いろんな色があるけどときくと」、

・こいが水がないから水色あるから水のかわりでしょ、  
というのです。

「どうしてこいのぼりたてるの」ときいても子どもの日だからというのと、わからないという答しかでませんでした。

#### △江戸川区V

・仲よくする日。

・お母さんにケーキ買ってもらう日。

・こいのぼりあげる日。

・おひなさまかざる日。

・男の子が仲よくあそぶ日。

・子どもたちがおだんごたべる日。

・かしわもちたべる日。

・しょうぶが咲く日、しょうぶをあげる日。

・けんかしない日。

・ちゃんばらする日。

・柔道、すもうする日。

・ままごとする日。

この江戸川区の子どもたちは、二年保育の年長組で昨年一回、園で子どもの日の経験のある子どもたちなので（足立区の子は一年保育なのではじめてです）、足立区より少しましな理解をしています。が、まだまだかかってもらう、食べる、という物との関係が切りはなせないようです。やはり足立と同じく、してはいけないものがしてよくなる開放？（まちがえた）の日になってしまっているのです。

△親の理解V（これは足立区しか調査できませんでした。）

・男の子が大きくなったお祝の日。

・病気しないで元気になりますようにお人形をお願いする日。

・お人形さんのように強い子になりますようにという日。

・子どもだけのお祭の日（昔の男の子だけ）。

・昔から男が偉いからもっとえらくなるようにという日。

というのです。やや正しい理解をしていると思われませんが、こどもの日のすんだ二、三日あとのある日「先生おとなってどうして時々いうことがちがうの、かわっちゃうの」とひとりの男の子が話してきました。私は、「どうして、何かかわったの」ときくと、「あのね、家の中で刀でチャンバラやっちゃあいけない約束だったのに、子どもの日はやってもいいっていつてね、僕だからきのうもやったらすぐおこられちゃった。」というのです。お母さんは、子どもの日だから今日ぐらいこことをいわずに尊重してあげようという気持からなのでしょうが、子どもはこんなにくらうことになるのです。

そして子どもの日とは、「いつもしていけない事が免除され、ゆるぎれる日」とあやまって理解されてしまうのですね。しかし、このようにはつきりまちがえている、まとはずれた理解の仕方をしている人もまだまだあるのです。それでは、本当の意味はどうなのでしょう。

### 歴史的な子どもの日と幼稚園でのあつかい方

#### 歴史的な子どもの日（端午の節句）

日本の五節句の一つで、一年を十二支に分けると五月は午の月に当る、その五の重なる日は端相の日であると古くからいいならさされている。五の重なる日は五月五日であるから端午節といって祝った行事が支那から日本に伝ってきた。一年を十二支に分けることは八卦の上では、一月ごとに一陽生れて四月になると純陽（じゅんとう）となつて五月になつてはじめて一陰が現れてくる。これを八卦の上で天風こう（てんぷうこう）といつて良くないものとされ、この陰気が陽気にさからつて人間の土地に邪魔をする。それをのぞくために節句にそれを用いる武器をかざるといっている。（大体に邪気を払うという事が本節で人間が幸福になるといふことが重要になつてゐる。）

#### こいのぼりの吹流しの起源

高卒の子に氣立の悪いのがひとりいた。この子が五月五日舟に乗

って海を渡ろうとした時難風でしずんでしまったが、死んでもその性質は直らなく水神悪鬼となつて人をなやました。ある人が五色の糸で、ちまきをむすんで海へ投げると蛇竜となつて天へ昇つて以来災難もなくなつた。そこで五月五日にちまきをこしらえるようになり、この糸がこいのぼりの吹きながしになつた。

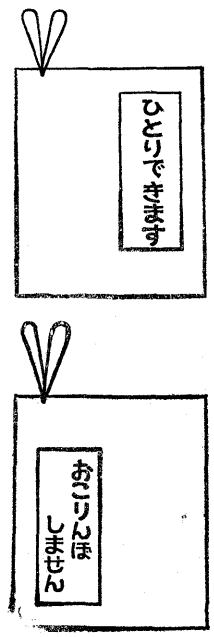
また武者人形をかざるのは神送りをする時の神の形代（かたしろ）の変化したものでこいのぼりは神を招くための招き代（おぎしろ）の幣立の変化したもので、なお古くは女の威張られる日であつたが三日節句が女の節句になつたので入れ替つて男の子のものになり女は忘れられた。（宮尾しげを著 年中行事）

以上の事でもわかるように、おとなや教師は子どもの日のあつかいはもちろん子どもの幸福を願つて祝つてゐることはわかるのですが幼稚園であつかう子どもの日は何かとんちんかんな感じがしてならないのです。それはこいのぼりふきながしです。がこれは行事辞典にもこいのように元氣にするためとはどこにもかいてないのです。子どもの幸福は元氣であることだからというのならそれでよいでしょうが、私はそれだからといつてこいのぼり作りに目の色をかえていることに強い疑問を感じます。

そして幼稚園では、子どもを楽しませる日として幻灯をしたり会食をしたり（かしわもちをたべたり）しますが、それも何かいきすぎた本来の意味から遠ざかったことのように考えられるのですが。

私がこう申しあげると経験ゆたかな先生方は、毎年やっていることで、父兄もこいのぼりを持って帰ることを楽しみに待っているし、子どもたちも入園して立体的なものを持っていく第一のものでよろこんでいるからそれでいいじゃないか、とおっしゃるのです。これも節分の時（七月号参照）と同じにわかるのですが、もしそうなら手先の製作、おみやげで終らせず幸福になろう、元気でござそうと子どもたちがたくましく共同で仕事がしあえるようにしたらと思うのです。今までの幼稚園でのこいのぼりの製作では、つきの悪い竹の棒に苦勞してこいをつけさせるので、かえって製作に対する意欲をなくすでしょうし、創造的な活動はできず人のまねをしたり劣等感を感じさせたりしてしまうのではないのでしょうか（活動やゆうどうのしかたのまずさがあることはわかるのですが）。そこで私は大きなこいを共同で一つずつ作ったのです。元氣な子は元氣なこいを作りましょうとよびかけ、床で大きなこいをグループごとにくって見たのです。そしてもう一つは子どもの日を祝って良い子になろうと話し合い元氣なよい子になるには自分のくせをなくそうと約束し約束カードを作りました。まずお母さんとの約束を記入し、

（例　すききらいしない、たまごもたべます。おへんじします。一人て来ます。）裏は幼稚園での皆との約束を私が記入しました。これは例えば、「おこりんぼしません。」といったように集団生活で直したいことを記入しました。



そしてカードを思い思いにかざり、リボンをつけて家にもちかえりました。この時母親に「ここの種、おどかしカードにならないように手紙をそえて注意しました。」

「節分と誕生会、ひなまつり、子どもの日、といくつかの年中行事をすこしてきて私は、日本の行事が本来の意味とあまりにかけはなれてしまっていること、かつてな理解をしていることにおどろき、その上、日本人はどうして物とのつながり（物をたべる、かう、もらう）でしか物事が考えられないだろうかということ、あまりにも心の問題をおろそかにしていることを思いました。幼児の時の子どもの日、たん生目が一生忘れられない人生の指針になるような行事、心の祝の目になぜできないのかということなのです。」

そうしていくためには、大切な幼児期の教育を幼稚園の先生方がお母さん方と力を合わせて考えていかなければならぬと強く思いました。これからやってくる行事も正しく理解し幼児の一人ひとりの心の中に正しく残っていく行事にしていきたいと考えております。